

### 3 花 き

| 項 目              | 作 業 内 容  |
|------------------|--|
| (1) デルフィニウムの栽培管理 | <p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○デルフィニウムの栽培管理</li> <li>○シンテッポウユリのは種、育苗</li> <li>○1～3月出荷用電照ぎくの温度管理</li> </ul> <p>＜シネンシス系‘さくらひめ’＞</p> <p>－切り花－</p> <p>9月中旬に定植した‘さくらひめ’等のシネンシス系デルフィニウムの生育ステージは2番花の萌芽期（採花予定は3月下旬から）になる。</p> <p>ア かん水、施肥管理</p> <p>土壌を乾かさないよう定期的にかん水し、2番花の萌芽を促す。施肥は3～4週ごとに有機配合肥料（窒素成分5～6 kg/10 a）を施用し、肥料切れを起こさないよう気を付ける。</p> <p>イ 葉かぎ</p> <p>採花後、葉が展開しドーム状の中から芽が数本抽台する。強い芽を抽台させるには葉を適宜除去し、株元に光が当たるようにするのが重要である。抽台した茎は勢いのあるものを2本に整理し、その後は10 cmほど抽台した頃に、土に接した葉を除去する。最終的に地際部から高さ15～20 cmを目安に葉かぎする。</p> <p>ウ 温度管理</p> <p>茎の伸長を促すために、夜温 10℃を確保する。昼温は20～25℃を目安に管理する。</p> <p>－鉢物－</p> <p>ア かん水、施肥管理</p> <p>日照量が多いとしおれやすいため、乾かさないようにかん水する。肥料が切れると葉が黄化するため、IB化成肥料を4号鉢で毎月3粒/鉢施用する</p> <p>イ 温度管理及び摘心</p> <p>10月下旬に定植し4号鉢で3月に出荷する作型（すでに摘心処理を終えている）は、引き続き最低温度5℃で管理する。4月に出荷する場合は、出蕾時に地際部より1 cmの高さで摘心し、無加温で管理する。</p> |

| 項 目                | 作 業 内 容  |
|--------------------|--|
| (2) シンテッポウユリのは種、育苗 | <p>＜エラータム系＞</p> <p>10月上旬に定植した‘パルフェライトブルー’等のエラータム系デルフィニウムの生育ステージは、2番花の生育初期～中期（採花予定は3月中～下旬）になる。</p> <p>ア かん水、施肥管理</p> <p>土壌を乾かさないう定期的にかん水し、2番花の萌芽を促す。施肥は2～3週ごとに、有機配合肥料（窒素成分5～6 kg/10 a）を施用し、肥料切れを起こさないようにする。</p> <p>イ 温度管理</p> <p>花茎の伸長を促すために、夜温 12℃を確保する。昼温は 20～25℃を目安に管理し、側窓換気により植物体に風を当てて高品質切り花に仕上げる。</p> <p>ウ 収穫、出荷</p> <p>花散り防止のため、エチレン合成を抑制する前処理剤（STS）を必ず使用する。</p> <p>本県の主要露地花きであるシンテッポウユリは、7～8月に出荷するために、早生・中生品種を1～2月に播種する。</p> <p>ア は種方法</p> <p>本ぽには約 3,000 本/a の苗を定植するため、種子はその 1.5～2 倍を準備する。は種方法は、セルトレイ（128～200 穴）に 1 粒まき、育苗箱にすじまき、ばらまき、などの方法があるが、すじまきとばらまきでは適宜間引きを行う必要がある。は種後は砂、バーミキュライト等で種子が隠れる程度に薄く覆土する。</p> <p>イ 発芽までの温度管理</p> <p>シンテッポウユリの発芽適温は 15～20℃で、これより高くても低くても発芽勢、発芽率が劣るので、発芽揃い（約 1 か月）までの温度管理には十分留意する。発芽開始まで保温と乾燥防止のためにトレイをポリエチレンフィルムなどで被覆し、電熱温床で温度管理を行うと苗の揃いが良好になる。</p> <p>なお、種子を 5℃の低温条件で 20 日程度催芽処理すると、発芽勢が向上する。25℃程度の高温条件下でも通常の半分の期間で発芽揃いとなり、育苗期間の短縮と管理の省力化が図れる。</p> |

| 項 目  | 作 業 内 容  |
|--|--|
| <p>(3) 1～3月<br/>出荷用電照<br/>ぎくの温度<br/>管理</p> | <p>ウ 発芽揃い後の管理<br/>日中は 25℃以上の高温にならないよう換気し、夜温は 5～10℃を目標に管理する。蒸し込んだ状態が続くと、苗立枯病が発生するので注意する。</p> <p>幼苗期はかん水をやや控え、本葉展開時(写真)から成苗(本葉 3～4 枚)になるまでは生育に応じてかん水量を増やす。同時に、500 倍程度の液肥を定期的に施用する。</p> <p>箱まきでの間引きは、子葉期と本葉 2～3 葉期の 2 回に分けて行う。1 回目は込み合った部分を整理し、2 回目は形質の均一化を図るため、葉幅が極端に細いものや広いものを除去する。</p> <p>1～2 月出荷用の電照ぎくは、低温害を最も受けやすい生育ステージであるため、‘神馬’など高温性品種では発蕾期の夜温を 13℃、花卉伸長期の夜温 15℃を保つよう加温する。</p> <p>3 月出荷用電照ぎくは生育ステージが花芽分化期にあたるので、‘神馬’など高温性品種では夜温を消灯の 7 日前から 15℃、消灯の 2～3 日前から 18℃を保つように 3 週間加温する。‘花秀芳’など中温性品種では、夜温を消灯の 7 日前から 12℃、2～3 日前から 15℃を保つよう 3 週間程度加温する。</p> <p>また、昼間は白さび病の予防のため極力換気に努め、室温が 25℃以上にならないようにする。</p> |



写真 本葉 1～2 枚のシテッポウウリの苗

(作成 農林水産研究所)